

## 史料編纂所所蔵『後龍翔院左大臣殿御記』紙背文書の翻刻

宮崎 井上 聡肇

史料編纂所が所蔵する『後龍翔院左大臣殿御記』については、『古代・中世古記録書誌情報の蒐集と古記録メタデータ・データベースの構築』（史料編纂所研究成果報告二〇〇八―四）において、解題・索引を付して本文の紹介を行ったものの、時間や紙幅の都合によって、紙背文書の翻刻を収載するに至らなかった。この度、宮崎肇（史料編纂所特任研究員）の参加を得たことで、全五八 points の史料翻刻を終えることが叶った。そこで本紀要の紙面を借りて、これを紹介させていただくと同時に、数年にわたる遅延を謝する次第である。

詳細な解題は右の報告書に譲り、本稿では、紙背文書を理解するうえで必要な最小限度の説明に止めることにしたい。『後龍翔院左大臣殿御記』は、転法輪三条公頼（一四九八―一五五二）の日記で、大永六・七年の日記および天文六年正月元日節会記の二冊が遺されている（架番号・貴五四―一八一・二）。他に逸文などは知られておらず、その全貌は明瞭でない。この二冊は他史料とともに、昭和二六年に三条家より史料編纂所が購入したものである。ともに袋綴装（四つ目綴）で、縦二五センチ、横四一・五センチ大の楮紙を縦に二つ折りにして冊に仕立てている。大永七年・八年冊は全五十一丁（表紙共紙、墨付五十丁）、天文六年冊は全十丁（表紙共紙、墨付九丁）からなり、ほぼ全紙に紙背文書

が確認できる。公頼への来信が過半を占めるが、勘返状や自身の土代も含まれている。そこに現れる人々は、日記記本文に登場するものが多く、表裏の関連は密接である。明らかに年次が確定できるものは見当たらないが、大永七・八年の日記記は浄書本とは考えにくいことから、その直前に公頼のもとに到来したものと見てよいだろう。天文元年分は浄書本であり、その成立は当該年より下がる可能性が強い。ゆえに紙背文書の年代も不詳である。いずれにせよ仮名書状が多数を占め、内容を正確に理解し難いものもあって、今後に残された研究の余地は大きい。また当該史料の画像は、本文ともども史料編纂所蔵目録データベースより既に閲覧が可能となっている。読者にあつては本稿を、画像とあわせてご検証の上、ご批判をいただければ幸いである。

なお本稿作成にあたっては、宮崎が翻刻を主担し、井上が注記や体裁の統一を行った。また本所技術専門職員和田幸大氏（影写担当）のご尽力により、史料デジタル画像上にて紙背文書のみを明瞭に読解できる環境を提供していただいた。記して感謝申し上げる次第である。あわせて末柄豊氏・遠藤珠紀氏には全般にわたって貴重な御助言をいただいたことを付記しておきたい。

【凡例】

- 一、正字・異体字については、現時通用の字体に改めた。
- 二、破損等によって文字が欠損する場合、その字数を計って□を挿入した。残画などから文字が推定できる場合は、その左傍に注記した。なお字数が判明しない場合は、□□をもつてこれを示した。
- 三、破損等により文字が欠損していても、残画から字形が判明する場合は、当該文字を□で囲って示した。
- 四、抹消された文字は、その左傍に々を附している。判読不能の場合、その字数を図って■のみを挿入した。
- 五、文字上に、別の文字を書き直している場合、書き改めた文字を本文として採用し、その左傍に訂正された文字に相当する数の傍点を附した。なお訂正された文字が判読可能な場合、右傍に×を冠して注記した。
- 六、校訂者の加えた文字については、すべて「」もしくは（）を附した。「」は文字の校訂に関わるものに用い、その他の参考または説明には（）を用いた。
- 七、複数の料紙からなる文書においては、その紙替りを「を以て示した。また折紙においては、折りの表から裏へ、また裏から表へと移る箇所」を配した。
- 八、散らし書き文書においては、奥から袖へ、下段から上段へと、筆順が大きく変化する箇所を／を配してこれを示した。
- 九、勘返状においては、勘返の付された位置に＊を配し、末尾に対応する本文を記した。

① 富小路氏直書状（折紙）  
○大永七・八年冊  
 第1紙紙背  
 寄思召候へぬ儀候へとも、くミ籠にても□□籠にても、ひからの□□

□籠御座候へ、一日へかりの逗留申請度候、御座候わすへ、被申入候までも候ましく候、かた／＼祇候候て、「可申入候共、御次可被申入候、

嶋守殿

② 某書状  
○大永七・八年冊  
 第2紙紙背

このほと御うとくしやと御ゆかしく思ひまいらせ候、一日へちとさ  
 とへゆき候事にて候、それにも御いり候事や、御ゆかしく思ひまいらせ  
 候、又御らんし候へした、ミのあやもすてたく候、そてとひさとかちと  
 ／やれ候つる、たれもぬし候へ、御すて候て給候へく候、もしやと申  
 候、御ゆかしや、かしく、

③ 勸修寺尹豊書状  
○大永七・八年冊  
 第4紙・第3紙紙背

其後者、以参可申入心中候之処、此間打つ、き不得隙候て、罷過候、今  
 晩参候て、申入候へんするを、今朝より近所に参会之事候て、遅々候之  
 間、自他所申入候、仍先日申入候間之儀、委注給候て、可申聞之由申候」  
（遊佐）  
 間、早々注給へく候、此砌切々申候者可然候、又畠山方へ事、とても  
（權長）  
 の事に河内守を憑入候、申聞候へのよし、可申分候、可有如何候哉、其  
 上にて、以誉田尚々可申候、返々可注給之由申候間、此砌日も候へへ不  
 可然候、「夜前も御言伝に申入候、不届申候哉、如何、／一日より申候、  
 御無沙汰候哉、無御心元候、返々明日にも早々可注給候、目出成就之事  
 □□入候、返々早々可給候、待申候、かた／＼以面尚々可申入候、かし  
 く、」

（切封墨引）  
（森盛時）  
 大輔殿まいる 申給へ

（勸修寺）  
 尹豊

④ 某(宗山等貴カ)書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第5紙紙背

昨夕<sup>(甘露寺伊長)</sup>甘黄參候て、一足興行候、暮も鞠もしつかに数揚候事にて、かすく存出候、／長途にひるのねのよし／<sup>(冷息)</sup>範遠物語申候間、不及案内候、今日又「可然暮にて候へ共、人数皆さし合候、無念候、仍明日辺東山御遊山候ましき哉らん、／□」に世上蒙然と候ほとに、さそふ水にもと思ひなり候、尚々大蔵さへ在国候へ、いと、「足の催す、めも□ましく候、秋ふかき天氣に<sup>(夏)</sup>したてもかろくしく候、かたく計合せひなく候、仍先日一卷、又比蔵之一巻借進之候、置所をうしなひ、連々心懸候て、只今尋出候間、進之候、相構而く他所へふかく可被禁候子細候間、」御心え候へく候、不私条々之子細候間、ふかく御かもしまいらせ候、自然貴亭へ寄来候人への、みせられ候へく候、其時□他所へ難儀候、やかてく被写候て、返給候へく候、是にて別而御興行候て、人体をつくり出され候へく候、「其時の必々一段此ほんを給候へく候、奉公随分候、如此物ハ我等ことき発気候ハす、いつとなきなへくを」ふと発候秘本にて候、一笑く、条々御みつから申候へく候、又さきの御歌ちとみせられ候へく候、かしく、

九月廿四日

(捻封墨引) 早破く、<sup>(三条公頼)</sup> 重相とのへ進覧之候 再

⑤ 某女房奉書(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第6紙紙背

さきに御申候つれとも、御まれ人として御まいり候へぬ御心のほかさ御まりを一そく／あそひしたく候、御まいり候へく候、<sup>(姉小路清俊)</sup>あね少「そなたの計として候、御つれ候て御まいり候へく候、<sup>(持明院基規)</sup>ちみやう院をもおほせ事候へく候、さ候へ、やかてく御まいり候へく候、御所へなり候ほとに、た、一そくあそひしたきにて候よし申とて候、かしく、

(捻封墨引) <sup>(三条公頼)</sup> 御かた御所へまいる

⑥ 某書状(豎・横折紙)

○大永七・八年冊  
第7紙紙背

ゆめくしく候へとも、とくり一まいらせ候、御しやうくわん候へ、御うれしく思ひまいらせ候、「このしきろうへ、御かもし御所へまいらせられ候て給候へく候、なかへあらくしくうつ、なく候ほとに、「御しやうくわむ候へと、思ひまいらせ候、ちと／なりとうつ、しくし候て、<sup>(三条公頼)</sup>御かた御所さまへ、まいらせ入候へんす」と思ひまいらせ候て候へとも、なにやらん」心ひまも候へて、うち過まいらせ候ほとに、うつ、なく候へとも、しきろうをまいらせ入候よし、御心え候て御申候て給候へく候、

(捻封墨引) くないきやう殿申給へ

かん

⑦ 某女房奉書(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第8紙紙背

御あらましの御かう、夕かた御き、あはせをへしまし候へんする、いかやうにも御まいり候御事にて候へ、御うれしく思ひまいらせられ候へく候、又ちん一色まいらせられ候へ、御うれしく思ひまいらせられ候へく候、た、一色の御事にて候よし、申とて候、かしく、

(捻封墨引) たれにても申給へ

⑧ 中屋定綱書状

○大永七・八年冊  
第9紙紙背

(捻封墨引) 高木弥次郎殿 まいる 御宿所 定綱

先刻者為御使御出之由候、罷出不懸御目、口惜敷存候、仍御能之儀被仰出候、則渋谷与次郎方へ書状遣処、如此返事仕候間、可然様御取合肝要候、尤被祇候可申上候へ共、急用之子細候て、只今又罷出候間、乍恐以書状申入候、此旨可有御披露候、恐々謹言、

三月廿三日

定綱(花押)

⑨ 某女房奉書（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第10紙紙背

文けさんに入候て候、御くわゐしなをし候てまいり候、御心え候よし申  
とて候、まことに／けふのめてたさ／をなし御事にて候、かしく、

（捻封墨引） 御返事まいる

⑩ 某（宗山等貴力）書状  
○大永七・八年冊  
第11紙紙背

（前紙欠ク）以外深雨候、思ひ絶候事候、無念候、明日就申沙汰、拙子  
も参 内之事候、旁以忿々事候、あはれく、ふと光貴候て、積話申度  
候、只御片思候、一笑く、明日風流候へきとて候、可有御見物候哉、  
あまりに御疎遠之間令啓候也、かしく、

（捻封墨引） 亜相公 瀧覽之候

再

⑪ 堯空（三条西実隆）勘返三条公頼書状（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第12紙紙背

此詠草、可然之様被加御言給候者、可為祝着候、昨日者御懇之仰、誠に  
喜悅候、旁以参可申入候、一紙憚多候、

（切封墨引）  
（三条西実隆）  
西殿

（三条）  
公頼

\* 1 御

\* 2 加拜見、返進之候、をろかなる身へたのもしならてへ、心叶候へ

ぬ歎と存候、如何、

（三条西実隆）  
堯空

⑫ 三条西公条書状  
○大永七・八年冊  
第13紙紙背

只今是より申入候へんすると存候つるに、芳問為悦候、誠去夜へちか比  
興彼声わすれかたさにて、いまちとさふらひ候へきを、事外夜ふけ候  
つる間、罷帰候、鼻ともへあまりなる体にてをかしく候、事外沈酔候つ

る、返々申計なく慰まいらせ候て、祝着候、（公頼）西室同御言伝申聞候、心得

候て可申之由申候、旁期参上候、かしく、／懸物給候了、返々近比の一  
興候、かしく、（三条実春）家公へも能々申入られ候て給へく候、別に申候へんす

れとも、たのミ存候、

（捻封墨引）

（三条西）  
公条

⑬ 三条西公条勘返三条公頼書状（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第14紙紙背

一昨日者、近比難忘存候、仍此一本只今見来候間、進入候、旁与風期参  
上存候、穴賢々々、

（捻封墨引） 御方申給へ

（三条）  
公頼

\* 1 勘申恐入候、

\* 2 拝顔本望候、

\* 3 あらく祝着候や、殊今日所用事候に、返々無申計候、

（捻封墨引）

（三条西）  
公条

⑭ 三条西公条書状（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第15紙紙背

夜前へ参申候、御歡樂の由、心もとなく存候、今朝へいか、わたらせ給  
候哉、御／養生肝要候、源氏今日読申仕候キ、／何時にても、御参のす  
きにうけ給候て、参候て読申仕へく候、御延引候へきかなと御沙汰候  
つれ共、一度の事へ参候へきよし申て候、何時もうけ給へく候、返々心  
もとなく存候、能々御養生あるへく候、旁可参申候、かしく、

（結封墨引） アカ御方申給へ

（三条西）  
公条

⑮ 某書状（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第16紙紙背

よへへふたく申候、うつ、なく思ひまいらせ候、又このふた枝給候、  
あらく御うれしや、ミ事さなかめくいりまいらせ候、まつく御

ひた、れの事、よへよきついで候つるほとに、思ひきり候て、御さもしへよくく申て候へハ、(高倉水家)やすきく御事にて候ほとに、ひやうへの／かみにたつねて、やかてくまいらせ候へきよし申され候、すく御うれしさ□□かみに物をたひ候より□の□しく候て、申つくしかたく候、□の□かみ申もいか、と思ひまいらせ候て、こ大夫にも聞へ候て申させ候、よくく心え御行候ほとに、御うれしさ□□もしにおほせ事候て、よく□□候へく候、てたき事やかて申候へく候、「たひくにもまいられ候へきほとに、ひやうへのかみによくく□□おほせ事候へハよく候、しつな申され候ハ、可然候、□□つけ候ほとにたつねまいらせられ候ハ、御心え候て□□しましてまいらせ候つるよし申て候へハ、ひやうへのかみにたつね申候て、まいらせ候へきよし申され候ほとに、かなしさひやうのかみのい□ん□ほうたいやかてくいてまいらせ候へく候、まつ御さたハ候ましく候、御心へにて御入候へく候、返々文給候までも候ハす候、さりながら文給候てもよく候へきやらん、めてたく心やすく思ひまいらせ候ほとに、ひやうへのかみの「かたへ御さもしへおほせ事候ほとに、□ち、にてもしまの御所にて、三

くいて候ほとに、御心え候てと、ないきにてミ、を御うち候て、よく御入候事候、さやうの計ハさらく候ハしも、もとよりもいて候、しまの御所にて、三く候ましく候、／かしく、  
(三条公頼)  
(捨封墨引) 御かた御所へ申給へ

①⑥ 某書状 ○大永七・八年冊 第17紙紙背  
 一日のもの、のこりほしく候、この物に給候ハ、御うれしく候へく候、御なかくしく候やく、又なにもしせん候ようもたち候へく候、たのこまいらせ候、かしく、

(捨封墨引) ひもしへまいらせ候

①⑦ 勸修寺尹豊書状 ○大永七・八年冊 第18紙・19紙紙背  
 寔去夜者御心静に本望存候、仍此一本見事さ祝着驚目候よし、能々心得候て、「可申入由申候、必々又与風以参申入候へく候、取乱いか、申入候哉、かしく、  
(勸修寺)  
(捨封墨引) 御返事 申させ給へ

①⑧ 勸修寺尹豊書状 ○大永七・八年冊 第20紙紙背  
 昨日者見事の花一段畏入候、さては一日申候下草、ふるく候へ共、進之候、たてられ候ハん哉、何さまふと参候て、一両日中に仕へく候、返々ふるく候て、いか、候へ共、先まいらせ候、かたく御身つからをし／候程に、御返事までもなく候、かしく、  
(勸修寺)  
(結封墨引) 万阿まいる申給へ

①⑨ 勸修寺尹豊書状 ○大永七・八年冊 第21紙紙背  
 夜前者懸御目候、畏入候、仍御やくそくの花、もしく御余分御座候へき歎、然者申請度候、たのこく入存候、／今朝も方々きりに罷候へ共、なく候、かしく、  
(勸修寺)  
(結封墨引) 万阿まいる申給へ

②⑩ 公忠書状(折紙) ○大永七・八年冊 第22紙紙背  
 卷破にて御入候、  
 只今者祇候仕候て、祝着存候、仍内々申入候今夕之当座進入候、明日にても明後日にても候へ、あそハされ候て、被下候ハ、可為畏悦候、可然様ニ御披露所仰候、尚々「参可申候へ共、以折紙申入候也、  
 七日  
 公忠

高木殿

⑳ 大炊御門經名書狀（折紙）  
○大永七・八年冊  
第23紙紙背

尚々早々貴札拜見、祝着候、

如仰改年之御慶珍重候、早々預御音信候、尤本望候、今春者細々必以參  
万可申候、円珠院他行事候、罷歸候者、御言伝候由、可申聞候、先々  
元日不參無念此事候、祝朔申旧候、欲楽計にて罷過候やうに候、迷惑過  
御察事候、猶々期參賀候へく候也、

九月（正月）

（大炊御門）  
經名

㉑ 三条西公条書狀（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第24紙紙背

芳翰薰読為悦候、系図一巻、慥給候了、次則進入候、仍明日御会／誠可  
參心中候、さりながら／彼十首いまた吟味を得候へぬ、此間とかく候て  
無沙汰候間、又例の当座にてさへるへき間、明日ハ難參候、体にした  
かい候て、晩頭參候へく候、／返々無念候、西室（公順）に御言伝のよし申候、  
御念比にかしこまり入候、さりながら昨日人のさそひ候つる程に、ま  
かり候事にて候よし申候、返々御懇祝着給よし可申候由申候、旁期面候  
也、かしく、

（捨封墨引）

（三条西）  
公条

㉒ 詠草土代  
○大永七・八年冊  
第25紙紙背

月照草花

（以下書カズ）

㉓ 持明院基規書狀（折紙）  
○大永七・八年冊  
第26紙紙背

寔肇年之嘉祥珍重々々、猶以不可有休期候、元日之者且面拜、祝着存候、  
將又明日連歌之儀、当番候条、旁以延引仕候、今日以參賀可申入候間、  
可令申中心候処、御懇之儀、畏存候、竹園へ三日之參候間、以參賀可

申候処、夜深候間、無其儀候、今日必以參賀可申入候也、  
七日（正月）  
回鱗 人々御中  
（持明院）  
基規

㉔ 富小路氏直書狀（折紙）  
○大永七・八年冊  
第27紙紙背

尚々御懇被仰下候、畏存之由、能々被申入候者所仰候、  
御書畏奉候、誠先日之後者、不能祇候候、御床敷存候、昨夕者甘庭にて、  
一足仕候事候、近日可祇候之心申候、仍明月御会十四日御張行、可祇候  
之由、内々被仰候、千万乍斟酌、先御題預置候、被寄思召候て、過分  
之至候、旁以參上可申入候、此由可預御披露候、

八月十二日

嶋守殿

氏直上  
（富小路）

㉕ 三条西公条書狀（豎折紙）  
○大永七・八年冊  
第28紙紙背

系図一卷進候、安間事に候、仍大河边、古今ミよしの、おほかはのへと  
候、／此分と覚悟候、誠先日ハ鞍馬／花ちか比の事候、御酒迎内々相待  
存候処、無念候キ、旁期參上候、聊故障事候間、如何申入候哉、かしく、  
（捨封墨引）  
（三条西）  
公条

㉖ 三条公頼書狀土代  
○大永七・八年冊  
第29紙紙背

以前不慮面会之後、可申通候之處、無其事打過候、背本意候、雖無指題  
目、細々可申通之条、可為本懷候、就中輕些之至、雖憚入候、薰物十具  
進之候、心事猶期後便候也、謹言、

十月六日

松岡寺御房  
（兼志）



(三条公頼)  
御方三もしまいる

(貞敦親王カ)  
竹

(捻封墨引) よへの御返事まいる 誰にても申給へ  
(姉小路)  
濟俊

③⑤ 某書状 (堅折紙) ○大永七・八年冊  
第37紙紙背  
只今下向候て、こまいらせ候、猶御案候へく候、御帰をこしまいらせ候、  
手凍如何申候哉、かしく、「  
(捻封墨引) 御返事まいる

③⑥ 某女房奉書 (折紙) ○大永七・八年冊  
第38紙紙背  
この二色ゆめくしく御入候へとも、おりふしこへまいらせ候ほとに、  
(三条公頼)  
御かた御所さまよりまいらせられ候よし申とて候、御心え候て、御申入  
候へく候、かしく、

③⑦ 勸修寺尹豊書状 ○大永七・八年冊  
第39紙紙背  
(前紙欠ク) 入夜候、我々も此一両日以前より、又足うつき候て、一向  
散々式候、昨日番にもやうく祇候候程に、乍存今夜などハ難御  
□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□  
御鞠見物申候事にて候、かたく、以參可申入候、取  
乱いか、申入候哉、かしく、「  
(捻封墨引)

(勸修寺)  
尹豊

③⑧ 姉小路濟俊書状 (堅折紙) ○大永七・八年冊  
第40紙紙背  
昨夕御書の折ふし客来の事候て、御返事申入候へぬ、背本意存候、「ま  
つく今日講師の事仰事候、此間しろしめし候ことく、事外かいきを仕  
候て、しはふき」を仕候間、声も出候ましく候、かたく、先しんしや  
くに存候、更々自由にあらず候、誰々にも仰事候へ、可然存候よし申  
給へ、かしく、「

③⑨ 某書状 (堅折紙) ○大永七・八年冊  
第41紙紙背  
おはし候やらん、御返事ながら御文くわしく見まいらせ候て、御うれし  
く覚させをハしまし候、まつくたのこく「入まいらせ候て、御き、  
まほしく思まいらせ候て、又申入候、まことに御み、かしましく」  
申候て、御はつかしくかなしく思ひまいらせ候、御うへのかこさまへも、  
／ひんなくからよきやうに御申候て給候へ、猶々御うれしく思ひま  
らせ候へく候、まいりて申たく思ひまいらせても、さためて「かこさま  
御すへりの御事と思ひまいらせ候ほとに、御文にて申入候、御ひしく  
の御事とおしはかりまいらせ候、めてたくかしく、  
むしやのこうちより  
こ

(結封墨引) たれにても御申  
くなくいやうの□□へ

④⑩ あさつね書状 ○大永七・八年冊  
第42紙・43紙紙背  
あらたまり候春のしるしもことにすくれさせをハしまし候て、御心の  
ま、なる事ともに候、数々御ゆる事ならすおほえさせをハしまし候こ  
とに候、わかきみさまいて「きさせをハしまし候て、御はんしやうの事  
と、なをくゆわるのまいらせ候、ひんながら御心へてうえさまへよく  
く御ひろう候て給候へく候、くるしからず候へ、たくひも御入候ね  
とも、くす、あめおけ二ツ、まいらせ入候、かまへて「あまりに  
ゆめくしく御入候へとも、このひんきいそき／まいらせ候ま、まい  
らせ入候、御かたひんきと御申入候へく候、又それさまへこんかう三そ  
くまいらせ候、返々くうへさたくらへ御れい申入たく候て、まつく  
一ふて申候、まゆつくりのへも進候にて御うたてしく候、かしく、「  
かしく、

(切封墨引)

くない□やう殿へまいるへく候

あさつね

④1 某書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第44紙紙背

昨日ハ被寄思召御懇之御書、過分さ打かたく／とりきたし候、まいらせ候たよりにも／くり返し／ても、おもしろやありかたやと」再三薫誦仕候、如仰此間者何と哉らん御疎遠さ慮外なから／其こと、も候ハねハ、細々參入仕候事も候ハて、何かと罷過候、「今更無念さ後悔此事候、仍我等在国の事おほしめしもよられ候ましき、ふと罷下候へきより国より申上候間、力なく其分候、近日母にて候者歡樂」仕候よし申候之間、何と□□のかれかたさ迷惑さ過御推量候、昨日今日中ふとしたる事候間、かねてハ「きこしめし候事も御入候ましき、我等さへふとしたるやうにて、俄に馳走仕候、」まことに此間ハ自他御等閑なく申承候、本望候、乍去あまり自由過たる事のこにて、「狼籍者におほしめし候ハんすると迷惑此事候、やかて罷上候て申入候へき、其時も于今不相替」無御等閑御目をかけられ候ハ、弥過分かたしけなく存候へく候、いかさま今日御暇乞に參し候て」猶々申入候へく候、取乱まいらせ候間、書状之式いか、申入候哉、其恐不少候、昨日ハ暮候間、御返事「不申入候キ、是又慮外背本意存候、旁期面拜存候由、可預御披露候、かしく、

(結封墨引) 昨日の御返事御披露 □□ □□

④2 三条公頼扇子副状土代

○大永七・八年冊  
第45紙紙背

大永第六小春朔、於万里小路中納言亭 若宮御方御対面。御盃頂戴之後、<sup>被下</sup>以此扇子、<sup>被下</sup>被下叶門法印近日十一面觀音像作進之故也云、

三條公頼  
垂三台藤原

記之

④3 三条西公条勘返三条公頼書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第46紙紙背

此間者積念以外候、何等事共御渡候哉、御疎遠口惜候、將又「無心中事候へ共、前年申請候し西室との、御筆候哉、古今集少間」申度候、可為如何候哉、田舎よりさりかたく／申候間、迷惑なから存したち候、其後目所旁以迷惑候、先日「巻いかにもみえ候ハね共、先」所々うつし候、何ともみえ候ハて、をかしく候、旁以面謁可申述候、返々集事憑存し候、かしく、

(捻封墨引) 御方申せ給へ

三條  
公頼

\* 1 同心申候、

\* 2 只今書写候とて、本に用候間、難進候、所用過候者、如何様可進候、

\* 3 勘申候、如何存候、先日尊閣より一冊借給候、祝着存候、旁參申候へき由、乍恐申入度候、

\* 4 連々御沙汰可然候、

\* 5 察申候、

三條西  
公条

④4 三条公頼御教書土代

○大永七・八年冊  
第47紙紙背

就高野庄之儀、御下知事、雖、相付候、若守護方不申御請候者、不可有其曲候間、内儀慥被巡調法候哉之由承候、遊佐被官人戸田聊申通事候間、

(畠山植長)

以彼者被申候之処、於被成御下知者、遵行打渡等事、無相違可申調之由、河内守返答之旨、以申送候、然間可被成御下知之条、併可為簡要候、以此旨可然之様、御披露可被祝着申之由、可申旨候、

④5 某書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第48紙紙背

兩日相隔候へ、千万日隔申候心中、二千句之間、ちとなにかと心中有増候て、会解念候、無念候、「今日可有光臨候者所期候、殊重宝可賜之由、御言伝一段期申候、尚々昨日一日候哉、不能拜顔候へ、一段積候事候、」必々面談期申候、昨日者播州之儀、内々告申候、国儀／いまた同篇之内、いさ、か庄之義申付候やうなるか、色を付候分候間、年中先候へき覚悟候て、又罷下候へきよし申候事候、先力を得候事候、条々期面候、かしく、」

(結封墨引) 御方参

④6 某(宗山等貴力)書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第49紙紙背

夜前者、御局御暇ても申度候へ、上臈むかひかてらに、ふと音信／申候は、やなど、／内々有増存候処、来臨候ほとに、只「そとのやうに存候て、参候つれ、」歴々もことに数益一身／被責候、御物語にも不及候、酔気ことに「正体候□で、迷惑など」□候へきやうもなく候、今朝散々事候、いか、皆々入見参候、本望候、御咳気如何とこれかれの心中て、参候へやなど」存候処、好事て却而御出候、満足候、毎度其方て「以外沈酔させられ候、こりはて候へ共、こりも候へぬ事候、上戸と思食候哉、近比「うつ、なく」東向へも見参に入候、御めつらしく候、よく／申度候、<sup>(勅修寺高子)</sup>権典侍殿久しく」御所にも御祇候候へぬとて候、いか、したる事候哉、不可然候由、ちと申され候へく候よし、申度候、出物の申状おかしく候、」猶々御氣よき事目出候、今日こし申候、一對へ「御言伝家公へ令申候」なから、尚もよく／申度候、公儀御取合憑申候よし申度候、姫宮わるさ御むつかしく、こなく」千尽事に候、乍去御まうけ候はんする、又かいしきにて候ほとに、まめに思食候へき事にて候、おかしく候、早破／、かしく、

(結封墨引) 御方進覽之候

再

④7 某書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第50紙紙背

今日御遊山之儀、御供可申候、然者老父も遊山に御供可申候由申候、く御過候て、其方へ可参候、「早々御用意候て、可有御待候、」此間同道衆なく候、／兩人計候、可御心安候、「かしく、」  
(結封墨引) 大輔殿まいる申給へ

④8 某書状(豎折紙)

○大永七・八年冊  
第51紙紙背

御状委細拜見申候、誠彼間之儀御無念之事候、乍去すてす御あつかひ可然候、仍青門への御状給候、御里へまいらせ候てをき候て、御ひんきにまいらせられ候へのよし、可申□「覚悟候、乍去遅々候へき間、若人をまいらせられ候へきかと、われ／書状もそれへまいらせ候、人つかい御座なく候へ、御さとへまいらせ候へく候、可給候、又「明日鞍馬への□□老父たかおへ罷候間、／人候ましく□三やけをわれ／と兩人へ可参候、それにてへ人数たりまいらせ候まじきか、町・<sup>(頭量)</sup>西坊など可被仰候哉、いつれにこなたにてなりとも、」日待は御さた候へきやらん、自然今日以参可申入候、かしく、

(捨封墨引)

□□

④9 堯空(三条西実隆)書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第1紙紙背

板輿見苦敷候へ共、安間事候、花帽子へ、愚老今へ罷出事候へぬ程に、人にやりて不所持候、所用候へ、人に借候事候、無念候、さ候様に思食度候御事目出度候、毎事可為御本望候、まつ／桂新免事、漸在富卿」<sup>(勅解申小路)</sup>被仰驚可被置候、去年へあまりに乏少、沙汰外候、当年へ可然之様候と、とても事、御意見憑存候、旁御いとまこひ如何様も可参申入候、穴

賢々々、

(捨封墨引)

(三条西実隆)  
堯空

⑤〇 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第2紙紙背

(河内国茨田郡)

けふよりのめてたさ、おほしめし候ま、に、ともろ木したかへられ候て、  
御ねんくせい／＼まいり候て、御心やすき御事のいわるの候へく  
候、「この御所にも、くはうわたくしおもふま、に御地のほう書もまい  
り、はりまもめてたき事のみ申候へく候、又□のたつへまつまいり候  
ハ、うけ給候へく候、ぬい物いてき候ほとに、まいらせ候へく候、  
又わざとこなたよりにもまいらせ候へく候やらん、もししちやうまい  
り候ハ、こなたへ給候へく候、かしく、」

(結封墨引) たれにても申給へ

⑤① 杉坊明算書状(折紙)

○天文六年冊  
第3紙紙背

態折紙遣候、仍当庄之儀、先日如申越候、三条殿へ者御前之公用可参候  
間、在所之儀者、此方へ半分可知行之条、諸成物早々可進納候、於無沙  
汰者、可為曲事候、恐々謹言、

七月廿六日

杉坊  
明算(花押)

(河内国茨田郡)

鞆呂岐  
名主百姓中

⑤② 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第4紙紙背

けさの文御うれしくおほえさせをひしました候、あまつらの入物たしか  
に／＼心えまいらせ候、御とりきたし候に、けにも御事「わりと思ひま  
らせ候、まことにいくたひ申ても、する／＼と御のほりのめてたさ、  
□□ハ御れい御まいり候て、□とけさんに入候つる、□身にも御みや給

候、よくそと」□<sup>〔御うら〕</sup>れしく思ひまいらせ候、□や□にぬまのほり□候ら  
ん、けさんに入たきと申てのほり候よし、かんし入まいらせ候、ハやと

しよりにて候そと、をしハかりまいらせ候、なにもおほくまいらせ候へ  
かすと、こもしへハ」世のさわかしさにか／＼しく申候、いか、とせう  
しき、我身などいた、ひやうらうつめになり候はんする、「心ほそさハ  
かりにて候、又さとハ昨日さやうにおほせ事候、返々御うれしく候や、  
やわたへの御事も御さうなど申、ミやうかも候ハぬ事にて、かもしに思  
ひ」まいらせ候へとも、とても御事に、ちとけに／＼しく御入候へ  
ハ、四もしくもしの思ひ候所もよく候はんすると、御うれしく思ひま  
いらせ候、いまちとまつ」世のさわかしさしまりまいらせ候へとも思  
ひまいらせ候、そのまへにちと四もしのまへをおほせられ候て、よく候  
はんかと思ひまいらせ候、こなたよりつくりあわせ候やうに思ひ候  
ハ、はらたち候はんほとに、まつ御さた候へて、そのしふんにおほ  
せられ候ハ、よく候はんかと思ひまいらせ候、よきやうにたのミ／＼」  
いりまいらせ候、御とりきたしの上に、よくそかやうにおほせられ候、  
御うれしさ申つくしかたく候、又一もし御つほねより御返事たしかにミ  
まいらせ候、御うれしさ、いまた」御心わろきよし、返々御心もとなく  
思ひまいらせ候、よろつ又申候へく候、かしく、

(結封墨引) たれにても□□□まいる

⑤③ 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第5紙紙背

昨日ハ御返事御思より候と御うれしくおほえさせをひしました候、まつ  
／＼御／＼おこりけのよし／＼うけ給候、返々御心もとなく思ひまいらせ  
候、よく／＼御やうしやう」候て、御さわ／＼とよき御事をうけ給候へ  
く候、かひひやうなどはやり候て、くはうわたくし／＼くちまねのやうに  
こそ候へ、返々御心もとなく思ひまいらせ候、又」きんふくりんの事御

うれしさとてもものに、けふいてきまいらせ候やうに、／たのミくま  
いらせ候、よへの女しよるけさまての事にて、ねむさいか、申候や、  
返々」とちの事、御むもしなる事にて、御心もとなさたのきまいらせ候、  
かしく、

(捻封墨引) たれにても申給へまいる

⑤4 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第6紙紙背

御返事ながら御こまくとみまいらせ候、御おこりけ御くすりまいらせ  
候て、よく御入候よし、めてたく御うれしき、このほと御心つくしの  
御くたひれにても御入候へく候、「まつくつくしよりのほり候物申や  
う、あらくめてたさ候やく、此月中に御つき候へく候、返々ちか  
らをつけ候て、めてたく御うれしきにて候、「めてたき事を猶々こし入  
まいらせ候、／又さきのさうしとも、きうようにて候、うちたへぬした  
にあらへのやうに候、あまりにほしくてもたへ候つれとも、こゝにある  
物さへのやうに候ま、もしやと申候つる、しんこきんもおなしやうに  
ぬしつたきとて候、「よきほんにて候、二色を三十疋にとくれく申  
候、したて候ハ大きな物にて候、ほしさ一もしなとも御ほしく候へく  
候、御さうく候ま、よそへも兼申候ハす候、かしく、」

(結封墨引) たれにても申給へ

⑤5 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第7紙紙背

さきにハ文さまいらせ候、さうしの物たしかに給候、きくもしの物、そ  
の文を「みせまいらせ候て申候、すくにひきつけまいらせ候、きうく  
なる物にて候ま、申つくしかたく候、「こゝもとこなく御ほしかり  
候人す／おほく候つれとも、たうさの事なり候て、御かたへかりに  
て候、いせ物かたりハ一たん御うら山しく存まいらせ候、「ほうこうし

ゆのひこへと申物のふてにて候、しんこきんハきくもしのにてふて  
にて候、これもおしき事にて候、あちきなにて候、しゆハかりにて  
候、「なにもかも入候ハぬおりふしにて、こゝもとの御事しやうへんに  
たえ候、せひなう候、又一もし御局へ御」ひんき候ハ、しらせ候て給  
候へく候、又あすしろき御こもしをハかり候ハ、御うれしく思ひま  
いらせ候、「やかてひるほとに返しまいらせ候へく候、夕さりよりとた  
のきまいらせ候、よくも候ハぬよこれまいらせ候ともくるしからす候、  
たのきまいらせ候、かしく、」

(結封墨引) たれにても申給へ

⑤6 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第8紙紙背

御かた御所へのかこ一、たしかにそなたの物にそへられてまいらせられ  
候へく候、／文とも中に入候、／よくくおほせつけられ候へく候、  
大夫へのかはこ二・文ともハ、さつしやうまいり候ハ、うけ給候て、  
加賀のかミ申つけて、そなたへまいらせ候へく候、／猶々よくくおほ  
せ事候やうにたのきく入まいらせられ候よし、心えて申付られ候へく  
候、あなくかしく、

(捻封墨引) たれにても御局へ申給へ

⑤7 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第9紙紙背

この御さうし、けさとくよりうたせられ候て、とちふつくりさせられて  
まいらせ候、よへの御のこりおほさ又まい候て申候へく候、／さき  
にハけふの御いわぬ色々給候て、めてたさ「千秋万せぬいわぬ入まいら  
せ候御事にて候、かもし御けかうにて一たんめてたさ御きも入のしる  
しとの思ひまいらせ候、かしく、又五めに「きやうたいの事とくく  
いてかたへ入候とおほせつけられ候て候けるに、けふハひま入候て、

中々やらん、かしく、

(捻封墨引) たれにても申給へ

⑤8 某書状(豎折紙)

○天文六年冊  
第10紙紙背

□きにはさとまいり候て、色々御物かたり申候よし申され候、思ひよらすふとのほらせ給候、／ひろせの事も又／けちつけ候□ぬ事にて□しきにて候、又昨日□<sup>(候カ)</sup>や、うけ給候つる□もしの事、ないく御物かたり申入候しか、□もしの四しやうにこの／□へ□□も□□けさ□□の□□し□□しか  
□□又□□／御覽せられ候はんするやらん、又一昨日申候つる御しやうそくの事ハ、中々候や、いかゝと」きまいらせたく候、又からすの事、ふけへ御心え候よし申されて候ほとに、「めてたさ御うれしさにて候、なに事もとく御つらくしき事ハ、せうしにかもしに思ひまいらせ候事にて候、ちと」とりきたし候てさなからにて候、かしく、  
(捻封墨引) 誰にても申給へまいる